

A-7 現実性・非現実性の対立とアラビア語方言における二要素否定の発展

熊切 拓

東京大学大学院人文社会系研究科研究員

cyberbbn@gmail.com

要旨

本発表は、アラビア語方言に広く見られる否定辞 *mā* と接尾辞 *-š* で述語を挟む二要素否定の発展について、否定における現実性・非現実性の対立という観点から新たな解釈を提出した。方言においては、*-š* は非現実モダリティ辞であり、否定辞 *mā* とともに非現実的否定を形成する。いっぽう、標準アラビア語においては、否定辞 *mā* による現実的否定と *lā* 系否定辞による非現実的否定の対立が存在したが、*lā* 系否定辞の衰退に伴い、現実的否定辞 *mā* のみが用いられるようになった。そこで、現実的否定と非現実的否定の対立を維持するために、非現実モダリティ辞 *-š* が、ある方言群において発展したのではないかと考えられる。

1. はじめに

標準アラビア語にはなく、アラビア語方言には広くみられる特徴のひとつに、否定辞 *mā* と接尾辞 *-š* ([ʃ]) で動詞などの述語を挟むという否定文の作り方がある。

(1) *hīya ʕaqlitt-ū w-hūwa mā ʕqal-hā-š*
彼女 認識する PERF.3SG.F-彼を そして-彼 NEG 認識する PERF.3SG.M-彼女を-IRR

「彼女は彼だとわかったが、彼は彼女だとわからなかった」

(アラビア語チュニス方言、熊切 2019a: 164 の例文 (16)。ただし表記とグロスを改めた)

2 つの要素によって否定文が形成されるという点から、本発表ではこうした否定のし方を二要素否定と呼ぶ。二要素否定の発展については、2 つの説が提出されている。これらの先行する解釈を踏まえた上で、この問題を、現実性・非現実性の対立という観点から検討するのが本発表の目的である。

なお、本発表は 2018 年に発表者が提出した博士論文「アラビア語チュニス方言の否定とモダリティ」の一部を発展させたものである。

2. アラビア語方言の概要とその起源

アラビア語は、標準アラビア語とアラビア語方言との 2 種に分けることができる。標準アラビア語は、現代のイスラーム圏においては、文語として、あるいは公的なレジスターにおける口語として用いられている。いっぽう、アラビア語方言は、中東、アフリカに分布するアラビア語変種の総称であり、これらの地域に暮らす人々にとって第 1 言語であるのが普通である。

このアラビア語方言の起源についてはいまだ定説はなく、標準アラビア語から方言が直接的に発展したとは必ずしも言えない。

なお、本発表においては、セム語学の伝統的な表記を用いる。略号は以下の通り。1/2/3: 1 人称、2 人称、3 人称、PROG: 進行・継続アスペクト標識、DEF: 定冠詞、F: 女性、IMPF: 未完了形、IRR: 非現実モダリティ辞、M: 男性、NEG: 否定、PERF: 完了形、PL: 複数、-: 形態素境界。

3. アラビア語方言における二要素否定

アラビア語方言は、こと否定のし方に関していえば、大きく二つに分けることができる。それは、否定

辞 mā のみによって否定文が形成される方言と、否定辞 mā (ma) と接尾辞 -š (-šī, -ši) によって否定文が形成される方言である。(2) は前者の方言、(3) は後者の方言である。

(2) **ma-šufit** 「私は見なかった」

NEG-見る PERF.1SG

(パレスチナの都市部と一部のベドウィン方言。Shahin 2008: 531r、グロスと日本語訳は発表者のもの)

(3) **ma-txəl-š** 「彼は入らなかった」

NEG-入る PERF.3SG.M-IRR

(アルジェ方言。Boucherit 2006: 64r、グロスと日本語訳は発表者のもの)

(3) のような否定辞 mā と接尾辞 -š による否定を本発表では「二要素否定」と呼ぶことにする。なお、接尾辞 -š は、方言によっては -šī や -ši などとなる。

二要素否定は、アラビア半島ではイエメンとオマーンの諸方言、レバントではシリア・パレスチナ地方南部の諸方言、そしてアフリカではエジプトからモロッコまでの諸方言、マルタ語に広がっている (Palva 2006: 607r, Wilmsen 2014: 1)。

4. アラビア語方言における接尾辞 -š の用法

二要素否定のうち、否定辞 mā は、標準アラビア語にも存在し、また (2) のように他の方言においても否定辞としても用いられているため、これを否定辞とみなすことができる。

そのいっぽう、接尾辞 -š については、これに対応するものが標準アラビア語には存在せず、その機能については多くの議論がなされている。まず、ここでは、アラビア語方言におけるこの接尾辞 -š の用法について概観する。方言によって異なるが、接尾辞 -š は二要素否定の他に、疑問詞、不定限定詞、疑問辞、否定辞としても用いられる。疑問詞の場合、-š はその構成部分となる ((4))。《いくつかの、ある、およそ》を表わす不定限定詞の場合は、名詞の前に現れる ((5))。疑問辞の場合は、動詞の述語末、もしくは文末に現れる ((6))。-š が単独で否定を表わす場合もある ((7))。

(4) 疑問詞 **ʔeš** 「(前置詞につく形式) 何」 (ダマスカス方言、Lentin 2006: 549v)

なお、ʔeš は語源的に次のように分析される。ʔeš < ʔayy šay? 《標準アラビア語：どの／何 (のもの)》 (Wilmsen 2014: 41)

(5) 不定限定詞 **ši šəšrīn** 「およそ 20」 (ダマスカス方言、Lentin 2006: 549v)

(6) 疑問辞 **ʔūmt-i ʔəget mən ʕand əl-kawwa ši**

スーツ-私の 来る PERF.3SG.F から ところ DEF-クリーニング店 疑問

「私のスーツはクリーニング店から戻ってきたか？」

(ダマスカス方言、Cowell 1964: 378。ただし Lucas 2016: 3 からの引用)

(7) 否定辞 **b-ašuf-iš** 「私は見ない」

PROG-見る IMPF.1SG-NEG

(都市部と一部のベドウィン方言を除いたパレスチナ方言。ただし、未完了形の否定のみで。Shahin 2008: 531r、グロスと日本語訳は発表者のもの)

(4) ~ (6) の例は、二要素否定のないダマスカス方言のものであるが、同様の例は二要素否定をもつ方言にも広く観察される。(7) の単独の否定辞となる例は、二要素否定をもつ方言のごく一部に見られる。

5. 二要素否定の発展に関する先行研究

本節では二要素否定の発展に関する見解のうち 2 つの代表的な見解をまとめる。本発表ではそれぞれ文法化説、再分析説と呼ぶことにする。

文法化説においては、その代表的な論者である Lucas (2007, 2010, 2013, 2018) をはじめとする多くの研究者によって、接尾辞 *-š* の起源として、標準アラビア語の *šay?* 《もの》が考えられている。

そして、二要素否定の発展については、フランス語の二要素否定、すなわち *ne* と *pas* による否定の発達と同様の過程が仮定されている。

フランス語の二要素否定の発展とは、もともと 1 つの否定辞 *ne* であったのが、この否定辞が「弱化」し、それを強めるために新たな要素 *pas* が加わり、最終的には否定辞としての機能がこの *pas* に移ったとするものである。この考えは、最初に Jespersen によって提唱されたため、Jespersen's cycle と呼ばれ、アラビア語方言の二要素否定の発展もしばしば、この Jespersen's cycle の 1 例であると考えられてきた (Esseesy 2007, Lucas 2010, Chatar-Moumni 2012)。具体的には、否定辞 *ma-* と共起して否定を強調していた名詞 *šay?* が、文法化を経て *-š* となり、否定辞 *mā* とともに通常の否定文を形成し、さらに *mā* なしでも否定を表すようになるというプロセスが推定されている。

しかしながら、アラビア語諸方言の否定文に現れる *-š* は、フランス語の *pas* とは異なり、疑問詞の一部、疑問辞、不定限定詞としても用いられる。この点について Lucas は、疑問などに現れる *-š* は、否定辞としての *-š* とは別の過程を経て文法化したものとし、二要素否定の発展の議論から除外している。

再分析説は、Wilmsen (2014, 2020) の主張するものである。彼は標準アラビア語の *šay?* 《もの》が文法化して否定辞 *-š* となったという文法化説を強く批判し、*-š* は原セム語の提示詞・指示詞に由来すると主張する。これが西セム語の現代南アラビア諸語を經由してアラビア半島南部の方言に伝わり、《～がある》という存在文を作る存在辞となったという。そして、この存在辞が、疑問辞、否定辞、不定限定詞に発展していったと仮定する。

二要素否定の発達そのものについては、Wilmsen は、疑問辞 *š* を含む疑問文に否定辞 *mā* が適用され、この *mā* 否定文において *š* が否定辞として再分析されたとしている。

これらの文法化説と再分析説の大きな違いは、ひとつには *-š* の起源の考え方にあるが、疑問辞としての *-š* の扱いにおいても大きく異なる。すなわち、文法化説においては二要素否定の発展から切り離されているが、再分析説においてはこれを否定辞へと至る発展の一段階をなすものとして捉える。この違いをまとめると (8) のようになる。

(8)a. 文法化説: *šay?* ‘(any) thing’ > 否定極性副詞 ‘at all’ > 否定辞 *-š* と疑問辞 *-š* に分化

b. 再分析説: 原セム語の人称辞 > 存在辞 *š* > 疑問辞 *-š* > 否定辞 *-š*

(Lucas 2016: 15 の図をもとに、発表者が修正)

そのいっぽう、この 2 つの説はともに、二要素否定における *-š* を否定辞の一部と捉える点で共通している。

6. 先行研究の問題点

本節では文法化説・再分析説における、否定辞 *mā* と接尾辞 *-š* の解釈上の問題をまとめる。

6.1. 否定辞 *mā* の解釈上の問題

標準アラビア語の否定には、*mā* の他に *lā/lan/lam* という否定辞 (本発表ではまとめて *lā* 系否定辞とする) も存在し、この *lā* 系否定辞による否定文のほうが一般的である。しかしながら、方言においては、*lā* 系否

定辞は縮小し、māが主流の否定辞となっている。

また、否定辞と動詞形の関係についても標準アラビア語と方言とでは違いがある。アラビア語の動詞形は、完了形と未完了形の2つに分けられる。動詞活用において標準アラビア語と方言とが大きく異なるのは、未完了形における法の区別である。すなわち、標準アラビア語の未完了形には、直説法・接続法・希求法の3種の法があるが、方言にはそれがない。

この法の区別の有無は、さらに否定とも関連している。標準アラビア語におけるlā系否定辞は、動詞の法と結びついた複雑な否定システム(9)をなしている。

(9) lam+未完了形希求法 = 過去(完了形)の否定

lā+未完了形直説法 = 現在(未完了形直説法)の否定

lan+未完了形接続法 = 未来(未完了形直説法)の否定

これに対し、方言の否定辞māは、いかなる動詞形(つまり、完了形でも未完了形でも)でも常に同じ形式となり、標準アラビア語と比べると非常に単純なものとなっている。

アラビア語方言の二要素否定の発展を議論するさいには、複雑なシステムをもつlā系否定辞がより単純な否定辞māに入れ替わった理由についても考慮する必要がある。

6.2. 接尾辞-sの解釈上の問題

文法化説・再分析説のいずれも、二要素否定における接尾辞-sを否定辞の一部とみなす点では一致している(ここで議論しているのは(7)のような例ではない)。しかし、この解釈には欠点がある。二要素否定における接尾辞-sが、否定極性語と入れ替わる現象がいくつかの方言で報告されている。

(10) ma ifhəm wālu
NEG 理解するIMPF.3SG.M まったく

「彼はまったく分かっていない」

(アルジェリア・ジジェル方言、Marçais 1956: 592)

この場合、否定辞-sがなくても、否定文としては成立する。すなわち、否定辞māは単体でも否定文を形成するということであり、このことは、二要素否定において-sもまた否定辞として機能しているという見解についての反論とはならないまでも、これを疑わせるに足る。

また、-sを否定辞として扱うことで、疑問辞の-sとの断絶が生じていることも問題である。

文法化説は、疑問辞としての-sを否定辞の-sとは異なるものと考え、二要素否定における議論から疑問辞の-sを切り離している。いっぽう、再分析説では、疑問辞の-sを否定辞の-sの前段階として捉えることにより、やはり、2つの-sの関係を切り離している。

しかしながら、二要素否定を用いる多くの方言においては、疑問辞の-sの用法も同時に存在している。再分析説では、こうした場合、疑問辞の-sを前段階の名残として捉える。しかし、この解釈にしても、文法化説にしても、いずれも通時的な解釈であり、疑問辞の-sと否定辞の-sを共時的にひとつのものとして解釈する余地はあるのではないかと考えられる。

熊切(2019b)は、アラビア語チュニス方言の-sについてこの共時的解釈を試みたものであり、これが非現実モダリティ辞であると主張する。

そこで、次節では、非現実モダリティ辞としての-sという観点から、疑問辞の-sと否定辞の-sの関係を考察し、さらに、否定辞māの機能を検討する。

8. 現実性と非現実性の観点から見た標準アラビア語の否定

すでに述べたように標準アラビア語においては否定辞 *mā* と *lā* 系否定辞が存在する。文否定における両者の違いについては、Holes (1995: 194-195) の指摘が示唆的である。それによれば、まず現在の否定では、直接話法や、発話と同時に行為の報告に [*mā* + 未完了形直説法] が用いられる。これに対し、[*lā* + 未完了形直説法] は習慣的事態と未来の事態を述べるときに用いられるという。そして、過去においては、[*mā* + 完了形] が話者にとって確実である過去を、[*lam* + 希求法] がそれ以外、すなわち確実ではない過去を否定するのだという。

ここで Holes のいう「確実である・確実ではない」という表現は、現実性・非現実性と関連付けられよう。なぜなら、ある事態について話者が確実だと声明することは、現実的な事態だと断定することであるからである。また、[*mā* + 未完了形直説法] もまた現前の事態について述べるがゆえに現実的な否定である。それゆえ、*mā* は、方言からも仮定されたように、現実的否定辞であるとみなすことができる。

いっぽう、習慣的事態と未来の事態は、非現実性と強い関連がある (Elliott 2000: 70)。それゆえ、[*lā* + 未完了形直説法] および、未来の否定である [*lan* + 未完了形接続法] は非現実的な否定であるといえる。確実ではない過去を否定するという [*lam* + 希求法] もまた同様である。ゆえに *lā* 系否定辞はすべて非現実的否定に関わる非現実的否定辞であるといえよう。

そこで、標準アラビア語における *mā* による否定と *lā* 系否定辞による否定は、現実的否定と非現実的否定との対立として捉えることができる。

ここで浮かび上がってくるのは、標準アラビア語における否定辞の違いによる現実的否定と非現実的否定の対立と、方言における非現実モダリティ辞 *-s* による現実的否定と非現実的否定の対立という、否定システムにおける構造的共通性である。

仮にアラビア語方言祖語においてもこの標準アラビア語と同様な否定システムが仮定できるとすれば、非現実モダリティ辞 *-s* は、現実的否定と非現実的否定の対立という構造的統一性を維持するために、ある方言群において発展したのではないかと考えられる。

9. 二要素否定の発展のプロセス

本節では、これまでの議論に基づき、二要素否定の発展のプロセスについて考察を行う。

まず、*lā* 系否定辞の衰退と、否定辞 *mā* の拡大については、次の3つの要因が複合的に関与していると考えられる。

- (14) ① 方言においては一般的に語末の母音の消失が生じたが、それにより主として語末の母音で区別されていた未完了形の3つの法の区別も失われた。結果として、非現実的否定における時制の区別が、*lā* 系否定辞と動詞形の組合せではなく、*lā* 系否定辞の形態的違い (*lā/lan/lam*) のみによって表わされることとなった。
- ② 3つの *lā* 系否定辞を使い分ける複雑なシステムよりも、単一の否定辞 *mā* のほうがシステムとしてはより単純であった。
- ③ 未完了形としか用いられない *lā* 系否定辞に比べて、完了形と未完了形の双方に用いることのできる否定辞 *mā* のほうが汎用性が高かった (Holes 1995: 195)。

この (14) に挙げた諸要因により、方言においては否定辞 *mā* が優勢となっていったと考えられる。しかしながら、否定辞 *mā* は現実的な否定辞であったため、これだけでは、方言祖語において存在した現実的否定と非現実的否定の区別を維持することができなかった。そこで、この区別を保持するために否定に関与したのが、非現実モダリティ辞の *-s* であった。

この非現実モダリティ辞の-šの発展については、(4)～(6)でみたように、疑問詞の一部、不定限定詞、疑問辞としての用法が、二要素否定ではない方言にも観察されることを考慮し、これらが二要素否定に先立って発展したと仮定すると、次のようなプロセスが想定できる。

- (15) ① šay?《もの》に由来する-šが疑問詞の構成要素となる。その結果、-šが不定性を表わすようになる。
- ② -šが名詞の前に現れ、不定性を表わす不定限定詞となる。
- ③ 述語末（もしくは文末）に現れて、文の述べる事態の不定性（疑問や推量）、すなわち非現実モダリティを表わすようになる。
- ④ 方言において優勢になりつつあった否定辞 mā とともに二要素否定を形成し、非現実的否定を表わすようになる。

ここに述べた二要素否定の発展プロセスは、-šの起源を šay? に結びつける点で、文法化説に近く、また、疑問辞としての -š をプロセスにおいて考慮している点で再分析説に近い。しかし、大きく異なるのは、-šを疑問辞や否定辞でもない非現実モダリティ辞として捉えている点と、現実的否定辞 mā の使用領域の拡大を二要素否定の発展と結びつけている点である。

二要素否定の発展については、もう一つ大きな問題が存在する。それは、どうしてある方言にはこれが起き、別の方言にはこれが起きなかったのかという問題である。文法化説も再分析説も、その説明として言語接触を考えるが、本発表はこれについて論じるだけの用意はない。

いずれにせよ、先行研究で扱われたアラビア語方言の否定の多様なあり方を考慮すると、本発表で述べた二要素否定の発展プロセスはアウトラインに過ぎない。標準アラビア語、そしてさまざまな方言の資料によって修正を加え、より具体的なプロセスを提示するのは今後の課題である。

参考文献

- Boucherit, Aziza (2006) Algiers Arabic. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2006), 58-66. / Chatar-Moumni, Nizha (2012) Negation in Moroccan Arabic: Scope and Focus. In: Arabic Language and Linguistics. Bassiouney, Reem and E. Graham Katz (eds.) 3-15. Washington, DC: Georgetown University Press. / Cowell, Mark W. (1964) A Reference Grammar of Syrian Arabic. Washington DC: Georgetown University Press. / Elliott, Jennifer R. (2000) Realis and irrealis: Forms and concepts of the grammaticalisation of reality. Linguistic typology 4. 44-90. / Esseesy, Mohssen (2007) Grammaticalization. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich and Andrzej Zaborski (eds.) (2007) Vol. II. 191-198. / Holes, Clive (1995) Modern Arabic, Structures, functions and Varieties. London/New York: Longman. / 熊切拓 (2019a) 「アラビア語チュニス方言において主題をもつ文の並列が意味するもの」『東京大学言語学論集』41, 155-179. / 熊切拓 (2019b) 「アラビア語チュニス方言における否定と非現実モダリティ」『言語研究』156, 97-123. / 熊切拓 (刊行予定) 『アラビア語チュニス方言の文法研究—否定と非現実モダリティ』東京：ひつじ書房 / Lentini, Jérôme (2006) Damascus Arabic. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2006), 546-555. / Lucas, Christopher (2007) Jespersen's cycle in Arabic and Berber. Transactions of the Philological Society, Volume 105, Issue 3. 398-431. Blackwell Publishing Ltd. / Lucas, Christopher (2010) Negative -š in Palestinian (and Cairene) Arabic: Present and / possible past. Brill's Annual of Afroasiatic Languages and Linguistics 2, 165-201. Leiden/Boston: Brill. / Lucas, Christopher (2013) Negation in the history of Arabic and Afro-Asiatic. In: Willis, David, Christopher Lucas and Anne Breitbarth (eds.) (2013) 399-452. / Lucas, Christopher (2018) On Wilmsen on the development of postverbal negation in dialectal Arabic. Zeitschrift für Arabische Linguistik. 67, 44-71. (Accepted version 1-17, [https://eprints.soas.ac.uk/23855/]) / Marçais, Philippe (1956) Le parler Arabe de Djidjelli (Nord constantinois, Algérie). Paris: Librairie d'Amerique et d'Orient Adrien Maisonneuve. / Palva, Heikki (2006) Dialects: Classification. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich and Andrzej Zaborski (eds.) (2006) Vol. I. 604-613. / Shahin, Kimary N. (2008) Palestinian Arabic. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2008), 526-538. / Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2006) Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics Vol. I. Leiden/Boston: Brill. / Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2007) Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics Vol. II. Leiden/Boston: Brill. / Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2008) Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics Vol. III. Leiden/Boston: Brill. / Willis, David, Christopher Lucas and Anne Breitbarth (eds.) (2013) The History of Negation in the Languages of Europe and the Mediterranean. Volume I: Case Studies. Oxford: Oxford University Press. / Wilmsen, David (2014) Arabic Indefinites, Interrogatives, and Negators. A linguistic History of Western Dialects. Oxford: Oxford University Press. / Wilmsen, David (2020) Croft's cycle in Arabic: The negative existential cycle in a single language. Linguistics 58 (2). 1-45. ([https://www.researchgate.net/publication/339595255_Croft%27s_cycle_in_Arabic_The_negative_existential_cycle_in_a_single_language])